

沖縄県青年海外協力隊を支援する会会報

# はいむるぶし

(沖縄県八重山地方の方言で南十星の意)

(題字：故末次一郎氏)

901-2102 沖縄県浦添市前田 1143-1  
国際協力事業団沖縄国際センター内  
TEL 098-876-6000(代)  
沖縄県青年海外協力隊を支援する会  
発行責任者：事務局長 東江賢次

## 海外雄飛の気運の高い沖縄

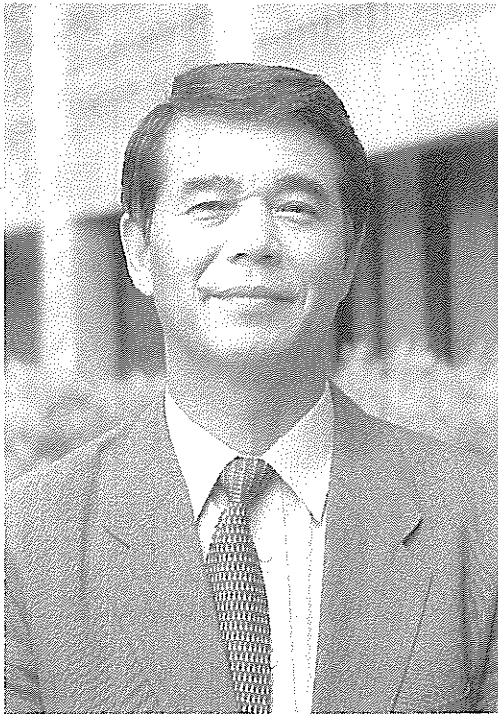
協力隊 200 名突破目前

沖縄国際センター所長就任あいさつ

このたび、四月一日付けをもって沖縄国際センター所長に着任致しました竹内と申します。「はいむるぶし」第6号の発刊にあたり、挨拶を述べさせていただきます。

私は国際協力事業団入団以来、国内では研修事業部・経理部・調達部、海外ではエジプト・フィリピン等で勤務し、数多くの国際協力に携わってまいりましたが、今ほど ODA に対する国民の目が厳しくなっている時はありません。平成十四年度の ODA 予算は前年度に比べて 10% 減、JICA 事業全体では 5% 減となっておりますが、この逆風の中、青年海外協力隊事業予算は 7% 増となっております、これだけを見ても青年海外協力隊事業にかけられている期待の大きさが伺えます。

お陰をもちまして、青年海外協力隊事業は今年で三十七年を迎え、十三年度末時点での派遣実績は全国で二万二千六百人、沖縄県では一九八名となっております。現在派



遣準備中の方を含めると、いよいよ今年度中に二百名を突破となります。昨年は九月に米国で痛ましい事件があり、その直後に実施された秋募集での応募者の激減が当初は危惧されましたが、逆にあのような事件を期に国際協力に対する感心が高まったのか、私たちの心配をよそに、過去三年来では最大数の応募者を集めることができました。

皆様よくご存じのように、ここ沖縄は歴史的にも中南米への移住者が多く、海外へ飛び出そうという気運の高い土地柄であります。実際に、昨年度の都道府県別の青年海外協力隊の青年人口十万人あたりの説明会参加者数および応募者数ともに全国第二位の数字でありました。今後も、ここ沖縄における青年海外協力隊事業のさらなる発展が大いに期待できます。

当時においては、この四月から沖縄振興特別措置法（沖縄振興新法）がスタートしました。新法の指針によると、当センターも沖縄における国際協力の重要な拠点と位置付けられていまして既に実施されている青年海外協力隊候補者に対する技術補完研修（野菜、果樹、家畜飼育等）のさらなる拡充等、当地の地域特産を最大限に活用した国際協力事業をさらに推進していく所在であります。等センターは今年度より、「J-net」と呼ばれる遠隔技術協力の推進拠点ともなっております。今後は遠隔講義、テレビ会議の導入により、海外との距離がさらに縮まるものと確信しております。最後に、青年海外協力隊事業ならびに沖縄県青年海外協力隊を支援する会の益々の発展に向けて、会員各位をはじめ皆様のご支援、ご協力を心からお願ひ申し上げる次第です。

国際協力事業団沖縄国際センター所長  
沖縄県青年海外協力隊を支援する会顧問

竹内 喜久男

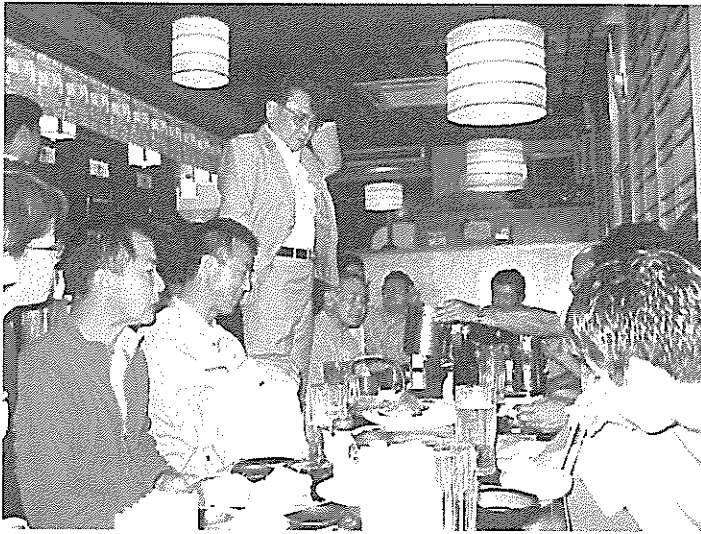
はいむるぶし

復帰前後の協力隊 O B と新しい O B が  
時代を超えて途上国への想いを熱く語った

去る四月六日（土）、沖縄国際センターに程近い浦添市のとある居酒屋にて沖縄県青年海外協力協会（協力隊 O B ・ O G 会）の親睦会が開かれました。

これまで交流を深める機会が少なかった昭和代の協力隊 O B の先輩方と平成代の隊員 O B ・ O G とが情報交換するというのが第一の目的です。

当日、昭和四十三年に沖縄県から初めて協力隊に参加した一期生の大先輩をはじめとして、平成十一年に赴任し、去年帰国した比較的新しい O B ・ O G まで約十五人が参加し、当時の任地での思い出話に花を咲かせました。



私自身、実際に話を聞いてみて、今ほど日本の若者が旅行雑誌を片手に気軽な気持ちで海外に出なかつた時代に、外に目を向けていた先輩方の偉大さには脱帽しました。そしてもう一つ、これだけ世代の違う人間が集いながらも、途上国での二年間という共通の課題に同じ目線で話し合える仲間としての感覚を常に感じていたのは、私だけではなかつたと思います。

これからもこのような会を通して、帰国隊員同士の親睦を深め、絆を強くしていきたいと感じました。

また、この四月から中国に専門家として派遣される善平朝信氏（S 45・3・インド・稲作）の壮行会も併せて行われました。氏のご健康と更なるご活躍をお祈りします。

沖縄国際センター国内協力員

高 良 英 治

（H 10 3 : タイ : 自動車整備）

全国事務局長会議開催される  
クロスロード発行が育てる会から協力隊事務局に

六月二十八日から二十九日にかけて東京の日本青年館において、協力隊を育てる会事務局長会議が開催されました。

全国から事務局長や専務理事ら二十五名、（社）育てる会から常任理事の黒河康元大使や青木盛久元大使、協力隊から金子洋三事務局長らが参加し、協力隊を巡る情勢や「育てる会」の活動のあり方について活発な意見交換が行われた。

課題として、（社）育てる会が発行しているクロスロード誌が、会計検査院の指導で、十月から協力隊事務局発行に変更されることがあります。これにより三種郵便の認可が取り消され、送料が倍増（七十八円→百九十円）することになります。現在は、全国の「育てる会」会員に対してクロスロードを毎月送付していますが、次年度以降は、財政的に対応できなくなり、各県組織での会費の見直し等の検討が求められました。

# はいむるぶし

## ボリビアで栄養失調児回復センター開所 小さなハートプロジェクト基金へ81万円が寄せられる

ボリビアの渡久山妙子隊員（看護婦）が進めていた小さなハートプロジェクトによる栄養失調児回復センターが四月五日開所しました。

首都ラパスに隣接するエルアルト市は地方からの急激な人口流入で水道、衛生設備も不足し、高失業率、スラム化、高い貧困率など、多くの問題を抱えています。そのため栄養失調児率は三十五%と高く、様々な病気の原因となり、乳幼児死亡率は十%を超えている状況です。

このような中で渡久山隊員は、重度の栄養失調児に対して栄養補給を行う施設の設置を計画し、エルアルト市やボリビア国内のNGO団体、そして当沖縄県支援する会などに資金協力を要請したものです。

その資金の確保のため、小さなハートプロジェクト基金を昨年十月から十二月まで支援する会会員及び県庁や市町村役場職員に募金を呼びかけたところ総額八十一万円が寄せられました。その中から申請額の三十万円を送金することができました。ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。

なお、小さなハートプロジェクトへの支援は一件につき三十万円が上限となっているため、残額については、今後の申請されるプロジェクトに活用することになります。

渡久山隊員は当会へ寄せた手紙で、「まだまだ資金不足などの問題を抱えているが、センターが開所でき、子供たちが一日も早く健康を取り戻せるようにこれからもがんばっていく」と記していました。

小さなハートプロジェクト基金への寄贈は次のとおり。

小さなハートプロジェクト基金への寄贈		
支援する会	27 会員	145,000 円
沖縄県庁	111 事務所	231,609 円
市町村	24 役所（場）	435,018 円
合計		811,627 円



開所式に集まった人々



ケアに来所した子供たち

# はいむるぶし

お推めの書コーナー

平川宗隆著『今日も あまはい くまはい』

好評発売中

当会運営委員の平川宗隆氏が「今日も あまはい くまはい」を昨年十月にポーターインク社から出版した。一昨年十一月の「沖縄トイレ世替わり」に次いで二冊目の本。

「トイレ」では、世界の処理の仕方の違いに「うくん」と驚くやら、有効活用の事例に「うくん」と感心するやら、今後の糞尿処理の行方に「うくん」と考えさせられるものでした。

「あまはい」は、著者が保健所勤務において経験したおかしな（本人らにとつては深刻な）事件を取りまとめたもの。「国場川のガサミが市場で売られているが大丈夫か？」とか「隣のマンションが、人間ではなく古タイヤであふれている」等々。驚きと笑いの中で、沖縄の実情を勉強させられます。

また、著者自身が描いたユニークなイラストをたくさん使って説明してあるので分かりやすく、飽きない本です。ぜひ、書店に立ち寄って探してみてください。



末次一郎著 文藝春秋刊

「温故創新 戦後に挑戦―心に残る人々―」

五月から全国発売



「戦後の、真の野人でこれくらい大きく国家的懸案に取り組み、前進させて日本の為に活躍した人を知りません。」これは、昨年七月十一日に世を去った末次一郎協力隊を育てる会副会長への中曽根康弘元首相の弔辞の一文です。

この五月に発刊された「温故創新」は、その末次氏が敬愛した人々についてその生き様などを機会がある度にしたためたものを、昨年五月に病魔に冒されていく体に鞭を打ちつつ三十五名に絞って大幅加筆して原稿を仕上げたもの。沖縄関係者としては、屋良朝苗元知事や大浜信泉元早大総長などが含まれています。他にも沖縄の復帰やその後の沖縄の発展尽した人々が多く触れられ、「もつとがんばらねば」と、新たに力が湧いてくる著書です。全国の書店で発売していますが、店頭にはない場合は申し込みください。

## 編集後記

- 七月三日に「末次一郎さんの念いを語る会」が東京で行われた。氏は、昏睡に陥る三日前には二時間の演説をこなした。
- 「温故創新」に登場する若泉敬氏は、死の三時間前まで仕事を続けた。その壮烈な生きざまの前で「疲れた」とは言えない。